

高齢者の利他的行動場面における 世代間相互作用の実験的検討¹

田淵 恵 三浦 麻子 関西学院大学

Experimental investigation of intergenerational interaction and older adults' generativity

Megumi Tabuchi and Asako Miura (Kwansei Gakuin University)

This study examined the effects of the reactions of younger adults toward older adults on the psychological attributes and behavior of elderly. Participants were 34 older male adults aged 60-82 years. They completed a questionnaire on generativity before and after the experimental condition, and were also observed taking flyers on different topics after the experiment. They were assigned to the younger condition or the same generation condition. In both conditions, the participants were asked to talk to recipients about experiences from their youth and the wisdom they have gained. The recipients responded to the participants in either a positive or a neutral way. The results showed that generativity was promoted most when the younger recipients responded in a positive manner, whereas the neutral reactions of younger recipients led to the inhibition of generativity. Younger persons' positive reactions promoted the participants' helping behaviors, as indicated by the flyers they took. The present study shows increases in the generativity of the elderly following positive reactions from younger recipients not only on questionnaires but also in an experimental setting.

Key words: generativity, altruism, intergenerational interaction, old adults, altruistic behavior.

The Japanese Journal of Psychology
2014, Vol. 84, No. 6, pp. 632-638

高齢者の他者との関わり、特に異世代との相互作用は、高齢者の心理的变化にどのような影響を与えるのであろうか。高齢期の発達研究では、高齢者の心理的発達を高齢に伴う個人内の長期的な心理的变化として捉えることが多い一方で、他者との関わりを考慮した社会的コンテクストの中で捉えることの重要性も指摘されてきた (Morgan, Schuster, & Butler, 1991; Stewart & Vandewater, 1998)。本研究では、高齢者の他者との関わり場面、特に次世代の若い世代に対する利他的行動場面において、相手との相互作用が高齢者の心理的

変化と行動にどのような影響を与えるかについて、実験的に検討する。

利他的行動、つまり外的な報酬を期待せず、他者のために自発的に行う、行為自体が目的の行動 (Bar-Tal, Sharabany, & Raviv, 1982) の研究では、かつて高齢者は行為の受け手とみなされることが多かった。高齢者は、若年者と比較して身体機能等が低下するため、支援が必要な存在であり、一般的に利他的行動を受ける存在として認識されていたからである。しかし、長寿化に伴い健康な高齢者が増加するに従って、孫育てやシニアボランティアなど、高齢者が自らの経験や知恵を活かして若者に対して利他性を発揮する場面が社会的に多く認められつつある (内閣府, 2012)。こうした高齢者の若者に対する“知恵袋”としての利他的行動は、高齢者自身の生きがい獲得、主観的幸福感の向上、そして Erikson の提唱した心理的発達である“世代性 (Generativity)”の向上につながるとされてきた (Kruse & Schmitt, 2012)。世代性とは、Erikson (1950) により“次世代を教え導くことへの関心”と定義され

Correspondence concerning this article should be sent to: Megumi Tabuchi, Department of Psychological Science, Kwansei Gakuin University, Uegahara, Nishinomiya 662-8501, Japan (e-mail: m.tabuchi@kwansei.ac.jp)

¹ 本研究は、“私立大学戦略的研究基盤形成支援事業” (平成 22 年度—平成 26 年度) として、関西学院大学応用心理科学研究センターが採択されている研究プロジェクト“心理学を基盤とするインタラクション評価システムの開発と応用”の一環として行われたものである。

た概念であり、壮年期以降（第Ⅶ段階）の心理社会的発達課題とされている。近年の長寿化や晩婚化等の社会的背景の変化に伴い、世代性は中年期のみならず高齢期においても重要な発達課題であることが指摘されている（Cheng, 2009）。

さて、世代性に関する先行研究には、高齢者の若者への利他的行動と世代性の直接的な関係性を仮定し、若者への利他的行動をとれば高齢者の世代性が発達すると主張するものが多かった（Heath & Heath, 1991; Christiansen & Palkovitz, 1998）。しかしその一方で、世代性の発達には若者との良好な相互作用が必要であり、利他的行動と世代性発達は必ずしも直接的に関係しないという指摘もある（Morgan et al., 1991; Stewart & Vandewater, 1998）。例えば Cheng（2009）は、高齢者の若い世代に対する利他的行動が、行動の受け手である若者から高く評価され、高齢者自身が若者から“尊敬された”、“感謝された”と感じなければ、世代性にネガティブな影響を与え、利他的な行動が継続しないことを報告している。

しかし、こうした調査研究の枠組みでは、若者からの反応や利他的行動を高齢者が回想的・主観的に評価せざるをえず、高齢者の世代性や行動に対する相手の反応の影響を厳密に定めることはできない。両者の因果関係を同定するためには、理論モデルで示された世代間相互作用の影響を、状況を統制し相手とその反応を操作するという実験的手法を用いて検討することが必要になる。もちろん、実験的手法で捉える心理的变化は、あくまでも短期的なものであり、縦断的な調査研究によって捉えられる長期的変化としての発達とは異なる。しかし、高齢者の心理的变化や行動を、長期的なプロセスを扱った発達理論から検討するだけでなく、その変化や行動を直接引き起こす心理的メカニズムの精緻な検討を行うことは、より包括的な理論モデルの構築に寄与するであろう。

これまでも、若者との関わりが高齢者に及ぼす影響について実験的に検討した研究はいくつか報告されている。例えば Adams, Smith, Pasupathi, & Vitolo（2002）は、過去の記憶を想起して語るという実験課題を行い、聴き手の世代が若い群の方がより高齢者の想起成績がよいことを報告している。また Kessler & Staudinger（2007）は、高齢者が知恵を用いて解決できる課題に取り組む際に、実験課題に高齢者同士で行う群と若者と高齢者で行う群を設けると、若者と一緒に課題に取り組んだ高齢者の方が、その後の認知機能テストの成績が良いことを示している。しかし、こうした研究では、単に“若者との関わり”が高齢者の心理的、認知的側面に対してもポジティブな効果のみを強調したものが多く、世代間の関わりにおける相手の反応といった相互作用の具体的側面まで考慮した研究や、ポジティブな効果の背景理論として高齢者の発達モデル

の理論にまで言及した研究はない。

そこで本研究では、世代性の理論モデルの実証方法として、実験的手法を用いる。実験では、高齢者が若者に対して利他的行動をとる場面を統制し、利他的行動を受け取る相手と反応を操作した。本研究では、二つの仮説を設定した。まず、若者が高齢者の利他的行動を受け取った際、それに対してポジティブに反応した場合、最も高齢者の世代性の向上が認められるとした（仮説1）。また、世代性の向上は次の利他的行動を誘発する（Grossbaum & Bates, 2002; 丸島・有光, 2007）ことから、行動レベルでも相手と反応の影響が認められると仮定し、若者が高齢者の利他的行動にポジティブに反応した場合に、高齢者の次の利他的行動が最も誘発されるとした（仮説2）。

方 法

実験参加者

実験参加者は60歳から82歳の中老年男性34名（平均年齢68.38 ± 3.53歳）であった。A大学の同窓会名簿から、60歳以上の男性163名に対して実験参加者の募集を行い、14名から参加の同意を得られた。また、A大学の所在するN市シルバー人材センターにおいて、A大学近隣に居住する60歳以上の男性会員に対して実験参加者の募集を行い、20名から参加の同意を得た。

実験デザイン

実験デザインは、利他的行動をとる相手の世代（2水準：(a) 若者、(b) 実験参加者と同世代の高齢者）と、相手の反応（2水準：(a) ポジティブ、(b) ニュートラル）を操作した、2要因4水準で、いずれも被験者間要因とした。

実験課題

世代性に関する行動として、高齢者の若者への利他的行動チェックリスト（McAdams & Aubin, 1992; 丸島・有光, 2007）の中から、“若者がその後の人生に活かせるよう、自分の経験や知識を教え伝える”という行動を選択し、高齢者が過去の経験とそこから得た知恵について教えるという語り場面を設定した。実験参加者には“若い頃から今までに得た知識や知恵で、のちの人生に役に立ったと感じることを、教えてください”と教示し、実験参加前にあらかじめ語りの内容について各自で整理してくるよう伝えた。語りはおよそ20分間とし、必要な場合は各自が持参したメモやアルバム等を参考にしながら語りを行うよう教示した。実験参加者は、約1.5m × 0.8mの机を挟んで長辺に座し、相手（実験協力者）に対して約1mの間隔で対面に着座し、1対1で語りを行った。

実験操作

語りの相手は、あらかじめ訓練された実験協力者(高齢者 2 名: 68 歳, 72 歳)(若者 2 名: 22 歳, 23 歳)が務めた。性別の影響を統制するため、実験協力者は実験参加者と同じ男性とした。実験協力者は、実験者が作成した反応マニュアルにより、ポジティブ反応およびニュートラル反応の訓練を行った。まず、実験者が反応マニュアルに沿って語り中の反応を実演し、次に実験協力者同士で実験協力者・参加者の役割を交代しながら反応の練習を行った。ポジティブ反応は、相手の会話内容への同意、会話のうながしといった言語的・近言語的側面と、会話の内容に応じた視線行動(ポジティブな語り内容の場合は視線を合わせ、ネガティブな内容の場合は視線を逸らす)、姿勢(身を乗り出す)、ジェスチャー(相手の語りに合わせてうなずく)、表情変化(ポジティブな語り内容の場合は笑顔を用いる)といった非言語的側面の両方で行った。ニュートラル反応では、ポジティブ反応に比べ、言語的・非言語的側面における行動を抑制した。

測 度

世代性 短縮版 Generativity 尺度(田淵・中川・権藤・小森, 2012)に回答を求めた。この尺度は 5 項目から成る 1 因子構造であり、LGS (Loyola Generativity Scale: McAdams & Aubin, 1992) 日本語版、次世代への利他的行動、社会的活動、主観的幸福感との関連により妥当性が示されている尺度である。項目は、“私が死んでも、人は私のことを覚えていてくれるだろう”、“自分の経験や知識を人に伝えようとしている”、“無理の無い範囲で募金がしたい”、“私が人のためにしてきたことは、後世にも残ると思う”、“何かに向かって前進していると感じる”の 5 項目であった。回答はそれぞれ“1. 全く当てはまらない”から“5. 非常に当てはまる”までの 5 件法で求めた。

利他的行動生起 語り直後に 3 種類(若者支援、健康、趣味)の情報を記載したチラシを提示し、若者支援チラシの持ち帰り行動を測定した。若者支援チラシには、“中高年者が家庭内や地域で若い世代を支援し活躍している事例”や、“若い世代への支援のコツ”についての情報を記載し、若者への支援を呼びかける内容とした。健康チラシには、“中高年者が心配している健康の問題(物忘れ等)”や“健康に暮らすための対処法”についての情報を記載し、健康維持を呼びかける内容とした。趣味チラシには、“中高年者に人気のある趣味活動”や“趣味活動を続けるためのコツ”についての情報を記載し、趣味活動を呼びかける内容とした。いずれのチラシもモノクロ印刷で、字体の種類、大きさ、文字の配置、文字数がほぼ同等になるよう作成した。

日常生活場面における利他的行動 実験参加者が日常生活場面でおこなっている次世代に対する利他的行動の程度を測定した。測定指標としては、McAdams & Aubin (1992) および丸島・有光 (2007) の次世代に対する利他的行動チェックリストを参考に作成された、世代性行動尺度(田淵・中川・石岡・権藤, 2012)の 18 項目を用いた。具体的な項目内容は、“自分の持つ知識や技術を、子どもや後輩に教えた”、“若い人の話を聞き、アドバイスをした”などであった。回答はそれぞれ“1. 全く行わなかった”から“5. よく行った”までの 5 件法で求めた。

実験手続き

実験は、2012 年 8 月から 2013 年 3 月にかけて行った。実験参加者は、相手の世代×相手の反応の 4 水準のうちいずれか一つにランダムに割り当てられた。実験参加者は、あらかじめ郵送配布された質問紙調査で基本属性(年齢、教育年数、主観的健康感)、世代性、日常生活場面における利他的行動について回答し、実験当日に持参した。実験室入室時は、まず実験参加者が実験協力者に対して、約 20 分間の語りを行った。語り終了後、世代性に関する質問紙調査への回答を行った。実験協力者は語り終了直後に、一時退席した。調査回答終了後、実験者が実験参加者に 3 種類のチラシを提示し、“少しお待ちいただく間にこちらのチラシをご覧ください。気に入ったものがあればどれでもご自由にお持ち帰りください”との教示を行い、実験室内にパーテーションで区切られたモニタールームに移動した。チラシは 10 部ずつ束にしてあり、3 種類の提示位置は実験参加者間でカウンターバランスをとった。実験者は、実験室天井に配置されたカメラ映像にて、実験参加者の選好行動(注視・持ち帰り)の測定を 3 分間行った。実験参加者には 3 分間という時間制限は知らせず、チラシを読み終わった場合も実験者が戻るまで退室しないよう教示した。チラシに対する選好行動の測定後、実験者はモニタールームから出て実験参加者と対面に着座し、約 5 分間、語りの感想等に関する面接を行った。その後、実験協力者が再度入室し、実験者によるデブリーフィングを行った。

倫理的配慮

本研究は、事前に関西学院大学の定める倫理委員会による倫理審査を受け、その実施を許可されたものであり、また実施の際にはその規定を遵守した(承認番号: 2012-14)。

結 果

操作チェック

実験参加者の語りの内容は、出生から幼少期の記憶、

Table 1
The mean scores and standard deviations of age, years of education, subjective health, generative act, and generativity in each group

	Old				Young			
	Positive (<i>n</i> = 8)		Neutral (<i>n</i> = 9)		Positive (<i>n</i> = 8)		Neutral (<i>n</i> = 9)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Age	69.00	(3.30)	67.78	(2.99)	66.13	(3.31)	70.44	(3.54)
Education	15.88	(0.35)	16.33	(0.71)	16.63	(1.84)	15.83	(1.51)
Health	3.44	(0.33)	3.20	(0.63)	3.10	(0.68)	3.33	(0.65)
Generative act	51.00	(11.12)	49.44	(13.59)	54.37	(12.41)	52.58	(14.59)
Generativity (pre-trial)	16.75	(2.60)	17.44	(3.12)	17.65	(2.43)	17.66	(3.39)
Generativity (post-trial)	17.85	(2.76)	18.71	(3.08)	19.51	(3.22)	16.30	(3.24)

学生時代の思い出, 仕事の経験により得た知識や知恵, 人生の教訓などであった。実験協力者が, 実験参加者の語り中にマニュアルに従って適切な反応を行っていたかどうかを確認するため, 各実験条件下において, 実験協力者の表情およびしぐさの分析を行った。ポジティブ反応を示す表情として“笑顔”, しぐさとして“うなずき”を抽出し, ニュートラル反応条件と比較した。コーディングには, 映像データ量的分析支援ソフト (sigsaji) (荒川・鈴木, 2004) を用いた。語り課題時間を統制するため, 課題時間内の全ての“笑顔”および“うなずき”の表出頻度を測定した後, 表出頻度を実験参加者ごとの語り課題時間 (17分—34分, 平均 26.68 ± 3.52 分) で除して1分あたりの表出頻度を算出し, 指標として用いた。“笑顔”および“うなずき”の定義をあらかじめ共有した2名が行ったコーディングによって得られた表出頻度の相関係数を算出した結果, 高い一致性が認められた (“笑顔” $r = .91$, “うなずき” $r = .79$) ため, 両者の平均値を分析に用いた。“笑顔”の1分間の平均表出頻度は, ポジティブ反応条件では若者3.87回, 高齢者4.92回, ニュートラル反応条件では若者0.03回, 高齢者0.08回であり, 2要因分散分析を行った結果, 反応の主効果のみが有意となった ($F(1, 30) = 198.82, p < .01$)。また, “うなずき”の1分間の平均表出頻度は, ポジティブ反応条件では若者32.61回, 高齢者29.91回, ニュートラル反応条件では若者13.84回, 高齢者13.11回であり, 2要因分散分析を行った結果, 反応の主効果のみが有意となった ($F(1, 30) = 4.83, p < .05$)。以上から, 実験操作は成功していたと考えられる。

実験参加者の基本属性および利他的行動, 世代性

各実験条件下の実験参加者において, 基本属性および日常生活場面における利他的行動の程度, そして実験前の世代性に偏りがないかを検討するため, 相手の世代と反応を独立変数とし, 各変数を従属変数とした2要因分散分析を行った (Table 1)。その結果, 基本

属性 (年齢, 教育年数, 主観的健康感得点) に群間で有意な差は認められなかった。日常生活場面における利他的行動の程度についても, 相手の世代の主効果 ($F(1, 30) = 28.32, ns$), 相手の反応の主効果 ($F(1, 30) = 7.14, ns$), 交互作用 ($F(1, 30) = .08, ns$) はいずれも有意ではなかった。また, 実験前の世代性得点においても, 相手の世代の主効果 ($F(1, 30) = 2.67, ns$), 相手の反応の主効果 ($F(1, 30) = .62, ns$), 交互作用 ($F(1, 30) = .15, ns$) はいずれも有意ではなかった。

相手の世代および反応が世代性に及ぼす影響

語り後の世代性得点の平均値 (標準偏差) は, 相手の世代が高齢者の場合, ポジティブ反応条件群 ($n = 8$) で17.85 (2.76), ニュートラル反応条件群 ($n = 9$) で18.71 (3.08), 相手の世代が若者の場合, ポジティブ反応条件群 ($n = 8$) で19.51 (3.22), ニュートラル反応条件群 ($n = 9$) で16.30 (3.24) であった。相手の世代および反応が世代性に及ぼす影響 (仮説1) を検討するため, 相手の世代と反応を独立変数, 語り前の世代性得点を共変量とし, 語り後の世代性得点を従属変数とした共分散分析を行った。その結果, 交互作用が有意であり ($F(1, 28) = 13.88, p < .01$), 相手が若者である場合は反応の違いによって語り後の世代性得点に有意差が認められ, ポジティブ反応条件の方がニュートラル反応条件よりも有意に世代性得点が高かった ($F(1, 28) = 17.50, p < .01$)。相手が高齢者の場合は, 反応の違いによる世代性の得点に有意差は認められなかった ($F(1, 28) = 1.19, ns$) (Figure 1)。

相手の世代および反応が行動に及ぼす影響

相手の世代および反応がその後の行動に及ぼす影響 (仮説2) を検討するため, 相手の世代×反応の条件下でチラシを持ち帰った人数の比率の差の検定を行った。逆正弦変換法による χ^2 分布を利用した2要因分散分析を行った結果, “若者支援”のチラシにおいては交互作用が有意であり ($\chi^2(1) = 7.38, p < .01$), 相

手が若者である場合にのみ、相手の反応による持ち帰り人数比率の違いが有意であり、ニュートラル反応条件下でより持ち帰り人数の割合が少なかった。相手が高齢者である場合は、相手の反応による人数比率の違いは有意ではなかった。“健康”のチラシにおいては、交互作用 ($\chi^2(1) = 0.23, ns$) および相手の世代、相手の反応の主効果は認められなかった。“趣味”のチラシにおいては、相手の反応の主効果のみ有意となり ($\chi^2(1) = 24.02, p < .01$)、ポジティブ条件下でより持ち帰り人数の割合が多かった (Figure 2)。

考 察

本研究では、高齢者が利他的行動をとる場面において、高齢者の世代性の向上および行動に、若者からの反応がどのように影響するかを実験的に検討した。

まず、仮説 1 に関する分析の結果、利他的行動を受ける相手からの反応と相手の世代に有意な交互作用が認められ、相手が若者であった場合、相手からの反応がポジティブである方が、ニュートラル反応条件に比べて有意に世代性が高いことが示された。一方、相手が実験参加者と同世代の高齢者であった場合は、相手からの反応による世代性への影響は認められず、ポジティブ反応条件の場合とニュートラル反応条件の場合に世代性の有意な差は認められなかった。この結果から、利他的行動を若者がポジティブに受け取る場合に最も高齢者の世代性の向上が認められるとする仮説は支持された。世代性の向上には、若い世代との良好な相互作用が必要であるとする先行研究の理論を、状況および高齢者の行動を統制し若者からの反応を操作した実験により、実証することができた。

また、仮説 2 に関する分析の結果、利他的な行動を受ける相手が若者である場合にのみ、相手からの反応の影響が認められ、相手からの反応がポジティブである場合に“若者支援”についてのチラシの持ち帰り行

動が多く認められた。この結果より、高齢者の若者への利他的行動に対する若者のポジティブな反応が世代性の向上に影響し、次の利他的行動の誘発につながるとする仮説が支持された。本研究により、世代性における主観評価の変化のみでなく、行動レベルで高齢者に対する若者からの反応の影響を明らかにすることができた。

高齢者の世代性と利他的行動に対する若者からの反応の影響が示された本研究の結果には、欧米文化と比較して個人よりも集団に価値を置く東アジア文化の影響が反映されている可能性が考えられる。McAmdas & Aubin (1992) 以降、世代性研究は欧米を中心として展開されてきたが、高齢者の世代性発達は加齢に伴う個人内発達として捉えられることが多く、他者、特に異なる世代との相互作用の影響を考慮した実証的研究はなかった。本研究や Cheng (2009) の研究における相互作用の影響を考慮した視点は、東アジア文化圏特有のものである可能性もあるため、今後は本研究で得られた知見の文化比較研究を進める必要がある。

近年、高齢者の社会参加へのニーズが増加するに伴い、高齢者が若者に対して利他性を発揮する活動が多く自治体で促進されている (藤原, 2012)。例えば、少子化対策の一環として、高齢者が経験や知恵を活かし、地域の子育て支援を行う取り組みが注目されている (内閣府, 2011)。一方、こうした取り組みの問題として、高齢者の行動が持続せず一定期間を過ぎると参加者が減少するために、活動が数年で終了してしまうケースが報告されている (大阪つどいの広場ネットワーク, 2006)。この原因の一つとして、高齢者の行動に対する若者からのポジティブな反応を受け取る仕組みがプログラムに組み込まれておらず、高齢者が一方的に行動し続けることを余儀なくされているために、意欲・行動が続かないことが考えられる。本研究において、若者からのポジティブな反応が高齢者の世代性の向上と、将来的な利他的行動の誘発を同時に

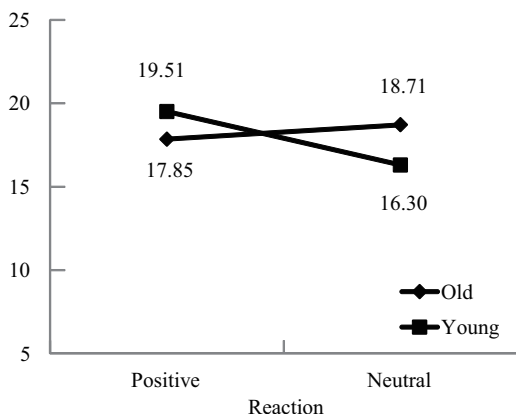


Figure 1. The mean scores of generativity scale in each group.

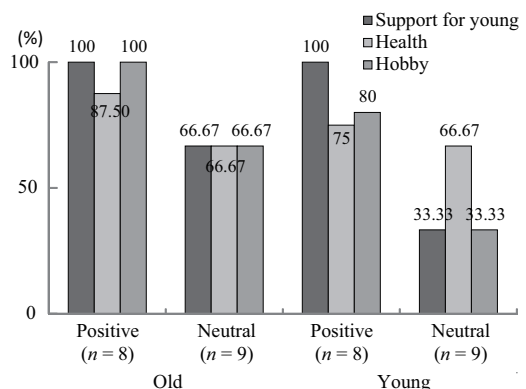


Figure 2. The rate of participants who take out the flyers about support for young, health, and hobby.

たらず可能性を示すことができたことは、高齢者が一方的に利他的行動を行い続けることを想定したプログラムの問題点と、例えば若者からプログラム参加後の感想や感謝の言葉を直接受け取ることのできる仕組みといった、ポジティブな反応が高齢者にフィードバックされる仕組みをプログラムに組み込む必要性の両方を示唆する知見であると言えるであろう。

本研究を今後展開させるにあたり、方法論上の課題が4点挙げられる。まず、本研究では一時的な心理的变化と行動を取り上げ、短期的な心理・行動メカニズムを解明することができたため、さらにこの結果を、世代性の発達理論を実験的に証明したものとして厳密に位置づけるために、より長期的な実験デザインと密な世代間相互作用を設定する必要がある。第二の課題として、本研究の課題として用いた、語り行動の妥当性の検討がある。本研究では、倫理的配慮により課題の負担を最小限に抑えた内容にしたが、語り行動が高齢者の利他性を十分に反映していない可能性も考えられる。負担の小さい語り行動場面であっても、若者からの反応の影響を示すことができたという点で、本研究は意義深いと考えられるが、今後は課題の妥当性を検証するため、語りの内容分析を行うとともに、より高齢者の利他性をより発揮させる場面設定を検討していく必要がある。第三の課題として、実験協力者と実験参加者の年齢設定の問題がある。本研究では、“同世代の高齢者”として設定した実験協力者と実験参加者との年齢差が10歳前後あるケースも認められたため、今後は“同世代”の定義を明確にする必要がある。最後に、行動指標の工夫を行うことが求められる。本研究では実験参加者への負担を考慮し比較的生じやすい行動を設定したため、結果のばらつきが小さかった。特に、ポジティブ条件下での若者支援チャシの持ち帰り比率が100%となっており、天井効果となっている可能性がある。“チャシの持ち帰り”という簡便な行動において、若者からの影響を示すことができたことは、本研究を展開させる上での貴重な資料となったが、今後はより高齢者の利他性を反映させた行動を設定する必要がある。第四に、本研究の結果は、実験課題として用いた語りの内容による影響を考慮していないため、今後は質的データとの関連を解明することが期待される。

以上から、研究の方法論等に課題は残されているが、高齢者の次世代に対する利他的行動を説明する理論モデルの構築において、本研究の知見は有効な意義を持つものと考えられる。

引用文献

Adams, C., Smith, M. C., Pasupathi, M., & Vitolo, L. (2002). Social context effects on story recall in older

- and younger women: Dose the listener make a difference? *Journal of Gerontology*, *57*, 28–40.
- 荒川 歩・鈴木 直人 (2004). しぐさと感情の関係の探索的研究 感情心理学研究, *10*, 56–64. (Arakawa, A., & Suzuki, N. (2004). Hand movements and feeling. *Japanese Journal of Research on Emotions*, *10*, 56–64.)
- Bar-Tal, D., Sharabany, R., & Raviv, A. (1982). Cognitive basis of the development of altruistic behavior. In V. Derlega & J. Grzelak (Eds.), *Cooperation and helping behavior*. Orlando, FL: Academic Press. pp. 377–397.
- Cheng, S. T. (2009). Generativity in later life: Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. *Journal of Gerontology*, *64B*, 45–54.
- Christiansen, S. L., & Palkovitz, R. (1998). Exploring Erikson's psychological theory of development: Generativity and its relationship to paternal identity, intimacy, and involvement in childcare. *Journal of Men's Studies*, *7*, 133–156.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company. (エリクソン, E. H. 仁科 弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 I みすず書房)
- 藤原 佳典 (2012). 世代間交流における実践的研究の現状と課題 日本世代間交流学会誌, *2*, 3–8. (Fujiwara, Y. (2012). Present situation and issues for practical research in intergenerational relationships: From the viewpoint of Gerontological studies. *Journal of Japan Society for Intergenerational Studies*, *2*, 3–8.)
- Grossbaum, M., & Bates, G. W. (2002). Correlates of psychological well-being at midlife: The role of generativity, agency and communion, and narrative themes. *International Journal of Behavioral Development*, *26*, 120–127.
- Heath, D. H., & Heath, H. E. (1991). *Fulfilling lives: Paths to maturity and success*. San Francisco, CA: Jossey Bass.
- Kessler, E.-M., & Staudinger, U. M. (2007). Plasticity in old age: Micro and macro perspectives on social contexts. In H.-W. Wahl, C. Tesch-Romer, & A. Hoff (Eds.), *Emergence of new person-environment dynamics in old age: A multidisciplinary exploration*. Amityville, NY: Baywood Publishing.
- Kruse, A., & Schmitt E. (2012). Generativity as a route to active aging. *Current Gerontology and Geriatrics Research*, Vol. 2012, Article ID: 647650, 9 pages.
- 丸島 令子・有光 興記 (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討 心理学研究, *78*, 303–309. (Marushima, R., & Arimitsu, K. (2007). Revised generative concern scale and generative behavior checklist (GCS-R, GBC-R): Scale reconstruction, reliability, and validity. *Japanese Journal of Psychology*, *78*, 303–309.)
- McAdams, D. P., & Aubin, E. S. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behav-

- ioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 1003–1015.
- Morgan, D. L., Schuster, T. L., & Butler, E. W. (1991). Role reversals in the exchange of social support. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, **46**, 278–287.
- 内閣府 (2011). 子ども・子育て白書 平成 23 年度版 (Cabinet office, Government of Japan)
- 内閣府 (2012). 高齢社会白書 平成 24 年度版 (Cabinet office, Government of Japan)
- 大阪つどいの広場ネットワーク (2006). ひろばにどう仲間たちの声 NPO 法人 Chacha-House, **1**, 11–16.
(Osaka Tsudoinohiroba Network)
- Stewart, A. J., & Vandewater, E. A. (1998). The course of generativity. In D. P. McAdams & E. Aubin (Eds.), *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation*. Washington, DC, American Psychological Association, pp. 75–100.
- 田渕 恵・中川 威・権藤 恭之・小森 昌彦 (2012). 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 厚生指標, **59**(3), 1–7.
(Tabuchi, M., Nakagawa, T., Gondo, Y., & Komori, M. (2012). Development of the short version of generativity scale in old age. *Journal of Health and Welfare Statistics*, **59**, 1–7.)

—— 2013. 4. 5 受稿, 2013. 7. 6 受理 ——